

日本旧石器学会

ニュースレター 第6号

NEWS LETTER No.6

JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION

## 特別寄稿 白滝遺跡群の調査成果と最近の状況について

長沼 孝（北海道教育委員会）

1995年に始まった白滝遺跡群の調査は、今年度で12年目を迎えた。現地調査は、2カ年の中断があるものの17遺跡、面積97,070㎡の調査が終了し、今年度も旧白滝5遺跡8,240㎡の調査を行っている。北見峠を抜ける北大雪トンネルから白滝市街の白滝ICまでの遺跡の調査は2000年に終了し、その区間の高速道路は供用を開始している。2001年からは白滝IC～丸瀬布IC間の遺跡の調査に入り、来年度以降の旧白滝地区の小規模な4カ所の遺跡の調査で、終了を迎える状況となっている。また、出土遺物の整理報告書作成作業は調査開始の1995年以来続けられ、1999年から現在までの6冊の報告書が刊行され、そのボリュームは総頁数5,915頁に及び、今後数年で報告書の作成も終了する計画である。

今回は、既刊報告書『白滝遺跡群I～IV・VI』に収録した旧石器時代遺跡の調査成果のポイントと最近調査の旧白滝5遺跡の状況を簡単に紹介したい。出土遺物総数は、17遺跡で4,630,831点、重量は約10tに及ぶが、縄文・続縄文時代の石器類が主体の3遺跡を除く旧石器時代の石器類が主体の14遺跡では、約391万点、約8.8tの量となる。遺跡別の出土量では、黒曜石の原石山である赤石山に通じる八号沢川と湧別川の合流点に近い4カ所の遺跡が全体の87%（上白滝8：35%、奥白滝1：21%、服部台2：20%、上白滝2：11%）、を占め、次に幌加沢の入り口に立地する旧白滝5遺跡（7%）が多い。また、当然のことながら、出土石器の大部分は石器製作時の剥片・破片で、定形的な石器は全体の0.9%にすぎないが、約35,000点に及ぶ。器種別にみると、石刃・縦長剥片が43.2%と多く、次に尖頭器が10.9%を占め、他は10%以下で、石核（7.9%）、二次加工ある剥片（6.1%）、削器（5.4%）、削片（4.8%）、舟底形石器（4.3%）、細石刃（4.1%）、搔器（3.6%）、石刃核（2.2%）、彫器（2.2%）、両面調整石器（1.7%）、ナイフ形石器（1.1%）、細石刃核（0.6%）、錐形石器（0.5



写真1 湧別川右岸の遺跡群

%)の順となり、尖頭器と舟底形石器が多く、細石刃関連は意外と少ない。重量では当然石核・石刃核が多く、全体の半数を占め、次に尖頭器(7.9%)、両面調整石器(6.4%)が多い。

『白滝遺跡群Ⅰ』では、上白滝7遺跡の広郷型ナイフ形石器を含む石器群(Sb-4~10)が注目される。今までに道内で発見された広郷型ナイフ形石器の量を大きく上回り、サイズや加工のバリエーションとともに、接合資料から打面調整を伴わない単剥離打面の石刃技法の共伴が明らかになった。また、石刃核の打面再生剥片を石核とした寸づまり剥片の剥離の存在から、「白滝Ⅰ群」との時間的近さが指摘でき、広郷型ナイフ形石器の編年的位置付けを考えることができるデータが得られた。

『白滝遺跡群Ⅱ』では、上白滝2遺跡の湧別技法札滑型細石刃核(Sb-3・6・10)、射的山型細石刃核(Sb-9)を含む石器群、有舌尖頭器を伴う石器群(Sb-15)が注目される。射的山型細石刃核が伴う石器群では、頻繁な打面調整と頭部調整を伴う大型石刃の接合資料が4個体あり、いずれも調整された石刃核母型で搬入され、石刃剥離が進行した石刃核の状態での搬入されている。細石刃核は20cmを超える大型の石刃素材で、置戸産の大型石刃の削器も伴っており、同石器群の行動パターンを探ることができる。有舌尖頭器を伴う石器群は、多量の尖頭器(431点)、彫器(179点)、搔器(125点)などがみられ、有舌尖頭器は細身の形状で斜平行剥離が特徴的で、柳葉形の尖頭器にも押圧剥離がみられる。また、6点の頁岩、安山岩製の有舌尖頭器はいずれも完形品で、あたかも見本品として搬入されたかのようなものである。

『白滝遺跡群Ⅲ』では、奥白滝1遺跡の台形様石器群の時期の「白滝Ⅰ群」(Sb-1~6)、円錐形の紅葉山型細石刃核を含む石器群(Sb-7~10)(写真3)、上白滝5遺跡の小型舟底形石器を含む石器群(Sb-6~11)などが注目される。奥白滝1遺跡の紅葉山型細石刃核を含む石器群では、細石刃246点、石刃488点、縦長剥片199点、細石刃核16点、石刃核14点などがあり、頻繁な打面再生・調整を行う石刃から細石刃への連続的な剥離の状況が明らかにされている。また、沢を挟んだ服部台2遺跡との遺跡間接合が確認された資料が2個体であり、同石器群の行動パターン的一端が明らかにされた。その後の服部台2遺跡整理作業において奥白滝1遺跡との遺跡間接合の資料が4個体となり、その詳細は『白滝遺跡群Ⅶ』で報告される予定である。上白滝5遺跡の小型舟底形石器を含む石器群では、加工の細かい薄手の尖頭器、横刃に近い左斜刃の彫器、安山岩製の斧形石器などが共伴し、尖頭器、彫器、舟底形石器の製作の状況が明らかに



写真2 奥白滝1遺跡の紅葉山型細石刃核石器群



写真3 上白滝5遺跡の小型舟底形石器群に伴う接合資料

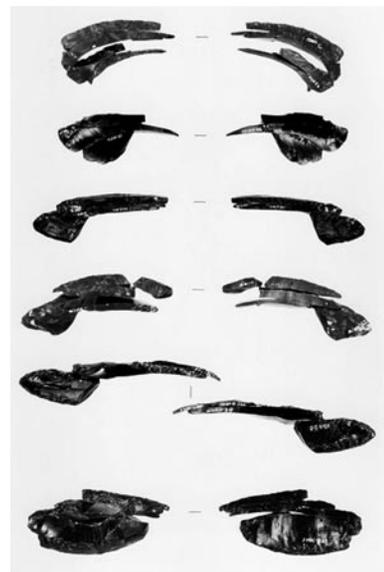


写真4 上白滝8遺跡の峠下型細石刃核接合資料



写真5 上白滝8遺跡の広郷型ナイフ形石器と接合資料



写真6 幌加沢と旧白滝5遺跡

なっている。特に彫器においては素材の獲得から二次加工、使用、刃部再生そして遺棄までの石器のライフ・ヒストリーが分かる接合資料（写真4）がある。

『白滝遺跡群Ⅳ・Ⅵ』では、白滝遺跡群の調査で最も出土量の多い上白滝8遺跡の報告がなされている。石器の総点数は135万点、総重量3.5tに及び、連続的な石器の分布状況から平面的な石器ブロックの分離が困難なことから、「区域」を設定し、その中での定形的な石器の分布や接合関係から石器群の抽出を行っている。抽出されたのは、「白滝Ⅰ群」、小型舟底形石器、大型石刃・大型舟底形石器、小型舟底形石器・打面調整のある石刃核、峠下型細石刃核、忍路子型細石刃核、幅広の有舌尖頭器、広郷型ナイフ形石器をそれぞれ含む石器群などである。「白滝Ⅰ群」は「裏面微細加工石器」、「基部平坦加工石器」などの小型石器が多いⅠa群から台形石器を含み搔器が多いⅠb群への変遷が指摘されている。峠下型細石刃核を含む石器群では、原礫面や単剥離打面からの頭部調整を伴う剥片剥離技術の共伴や、素材の厚さの違いに応じた加工頻度の高低により細石刃核を調整して同一規格の細石刃を剥離していることなどが明らかにされている（写真5）。広郷型ナイフ形石器を含む石器群は、剥片剥離技術や石器の形態・二次加工技術は上白滝7遺跡と同様であるが、素材の石刃剥離が少ないという相違がみられる。また、6cm以下の小型品の中には折損後の再加工品があることや先端部の意識が強い二次加工から尖頭器的機能が指摘されている（写真6）。「白滝Ⅰ群」と広郷型ナイフ形石器を含む石器群以外では大小の尖頭器がみられ、中には54×25×14cmの大型の両面調整石器を搬入してさらに加工を行い、最終的には52×14×6cmの断面が凸レンズ状の形態の整った大型の尖頭器の状態でも搬出した状況が分かる中空の接合資料（272点接合、重量8,613g）もある。

2003年に調査された旧白滝5遺跡（写真7）では高位部（標高390m前後）と中位部（360～370m）に石器の集中がみられた。高位部では、残核の特長は峠下型細石刃核だが、接合作業の結果、素材は尖頭器ないし細石刃核母型の両面調整石器の製作時の剥片であることが明らかとなった資料群がある。他の遺跡の峠下型細石刃核を含む石器群との比較とその位置付けが課題である。中位部では押圧剥離で精緻に二次加工され、鋸歯状の縁辺がみられる薄味で小型柳葉形の尖頭器（写真8）がまとまって出土している。同様な石器は奥白滝1・上白滝8遺跡などで単発的にみられたが、ブロックで発見されたのは初めてである。同様にまとまった資料としては帯広市大正3遺跡で爪形文土器と共伴した石器群があり、その関係が注目される。

各石器群の年代に関しては、決め手が乏しいというのが現状である。遺物包含層の下位に大雪御鉢平軽石(約 30,000 年前降下)があることから、出土石器はそれより新しいものであることは言える。炭化木片(主に針葉樹)の放射性炭素年代測定では 10,000 ~ 27,000 年前の数値は得られているが、石器群の平面的な重複等から石器ブロックと炭化木片の確実な対比が困難な状況にある。また、黒曜石水和層測定では、同一石器群においてもばらつきが大きく、縄文時代と旧石器時代の区別はできるが、それ以上のデータとすることはできない。

大量の石器の発掘と接合作業の結果、様々な石器群の石器製作の様子やそれを残した人々の行動パターン的一端が明らかになり、国内最大規模の黒曜石原産地における遺跡の状況が分かってきた。しかし、石器群の編年や他の地域の遺跡との比較検討という大きな課題がある。また、黒曜石以外の石材や白滝以外の黒曜石を利用した石器の搬入も一定程度みられることから、北海道内における石器石材の多様な動きも今まで以上に明らかになってきた。以上ような課題に取り組むためにも、わかりやすい調査成果の紹介や解説にも努めなければならないと考えている。

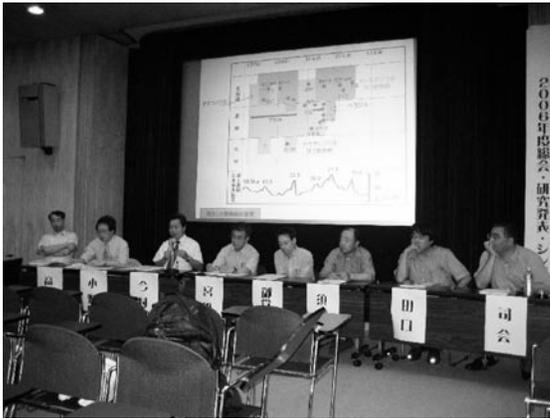
2005 年 10 月には 4 町村(白滝村、丸瀬布町、遠軽町、生田原町)が合併して遠軽町となり、「白滝村」の名称はなくなったが、現在、旧白滝村域で出土資料の展示・保管施設の整備を行う方向での検討が遠軽町で進められている。多くの方々のご協力、ご教示をお願いしたい。

#### 第 4 回日本旧石器学会報告

2006 年 6 月 17 日(土)、6 月 18 日(日)に埼玉県立歴史と民俗の博物館において、第 4 回日本旧石器学会が開催され、記念講演、研究発表、ならびにシンポジウム「旧石器時代の狩猟」が行われた。

1 日目は記念講演、一般研究発表が行われた。記念講演は京都大学市川光雄氏の「アフリカ狩猟採集民の狩猟」で、アフリカを代表する二つの狩猟採集民である、南アフリカのブッシュマン、中央アフリカのピグミーを取り上げ、生活環境、狩猟法、捕獲量などを比較した後、狩猟における分配行為の意味や人類社会における狩猟の役割などを進化の面から講演された。一般研究発表は 5 本で、「旧石器時代遺跡のジオアーケオロジー—明治大学調布附属校用地の遺跡(仮称)の調査(2)」(発表者明治大学校地内調査団野口淳)、「神子柴遺跡の石器石材利用について」(発表者中村由克)、「黒曜石分析の従来方法の問題点」(発表者国武貞克・大屋道則)、「西南ドイツにおける後期旧石器時代初頭の研究状況」(発表者山岡拓也)、「狩猟用具の機能の検証—復元弓を用いた実験研究」(石井良)である。

2 日目はシンポジウムを中心に行事が進行した。午前中に 7 本の基調報告が行われ、狩猟対象に関連して、「後期更新世の日本の中・大型動物相について」(高橋啓一)、「野尻湖における狩猟活動」(小野昭)、狩猟方法に関連して、「陥穴から考える—静岡県愛鷹東南山麓 BB Ⅲ期の場合」(今村啓爾)、「南九州細石刃文化期の陥し穴猟」(宮田栄治)、「狩猟活動の民族誌：重力式罾の復元を通して」(田口洋美)、狩猟具に関連して、「ナイフ形石器の機能」(御堂島正)、「狩猟用刺突具の変遷」(須藤隆司)の各発表があった。また、各発表に対してあらかじめ用意されたコメントーターによりコメントが行われた。討論会は午後から行われ、最初に司会者(堤隆、佐藤宏之)と各発表者の間でやり取りを交えながら各基調報告の内容を端的に表すキーワードの提示と発表の論旨の解説行われた。その後、参加者との質疑応答が行われ、動物相の復元や陥穴猟の内容などについて意見交換がなされた。討論会の後半では、「狩猟対象獣」、「狩猟方法」、「狩猟具」の 3 つのテーマで議論された。第 1 のテーマでは、後期旧石器時代後半期は現在とほぼ同じ動物相に変化したという認識(高橋啓一)を元に議論が進められ、大型動物絶滅の時期やその背景について人類の狩猟活動との関連(オ



討 論 会

ーバーキルなど)などの観点から活発に議論された。第2のテーマでは、陥穴の地理的分布、立地的特徴、構造的特徴と狩猟方法の関連について、過去に陥穴猟の論文を発表している今村啓爾、稲田孝司、佐藤宏之の3氏を中心に議論されたが、現状では解釈の相違が大きく、今後さらに議論を継続していく必要があることが再認識された。第3のテーマでは、使用痕研究、石器の残存物研究と問題点などの紹介が中心となった。旧石器時代における狩猟は研究の重要なテーマであるが、日本列島では対象獣が直接的な証拠として遺跡にほとんど残らないことから、これまでまとまった議論がなく、今回のシンポジウムは今後につながる重要な議論が行われたといえるであろう。

なお、1日目・2日目の休憩時間などを利用して、会場に隣接したロビーでポスター・セッションが行われ、3本の発表があった。

## 2004 - 2005 年度活動報告

2005年4月以降の各委員会の活動概要は以下のとおりである。

**総務委員会** 3回の役員会の準備、第4回研究発表・シンポジウムなどの開催準備を行った。2006年6月17・18日に埼玉県立歴史と民俗の博物館において開催した第4回総会の調整事務を行った。役員改選の日本旧石器学会選挙管理委員会設置後、選挙に関する事務を行うとともに、選挙開票作業に立ち会った。会誌(第1号)、ニュー

ースレター(4・5号)などの送付事務を行った。また、2005年10月に首都大学東京で行われた第9回考古学コロキウム、2006年2月に長野県飯田創造館で行われた竹佐中原遺跡報告会・シンポジウムを後援した。

**会誌委員会** 会誌第2号の編集を行った(編集長木崎康弘)。役員会の協議に基づきシンポジウム小特集号とし、シンポジウム関係論文と一般投稿原稿で構成することとした。原稿は2005年9月30日で締め切り、巻頭言1、総説1、シンポジウム関連論文6、シンポジウム報告1、原著論文3などで構成することとした。シンポジウム関連論文は委員会内査読とし、一般投稿論文は匿名の査読とした。一般投稿論文は査読者からの指摘や委員会からの意見などを執筆者に伝え、必要な修正を行ったうえで原稿を受理した。最終的には合計178頁となり、2006年度の6月に刊行した。なお、新たに藤田尚会員に委員として加わっていただき、自然科学系の原稿編集をお願いした。

**ニュースレター委員会** 会計年度の変更に伴って発行月が変更され、第4号を2005年9月、第5号を2006年3月に発行した。第4号は第3回総会、シンポジウムの報告ならびに2003-2005年度の活動報告を行い、特別寄稿に資料蓄積の著しい静岡県愛鷹山麓の旧石器時代遺跡の近年の発掘調査について財団法人静岡県埋蔵文化財センター笹原芳郎氏に執筆を依頼した。また、国内関連学会の動向、海外関連動向(渉外委員会提供の国際会議、シンポジウムなど)などを掲載した。

第5号は、特別寄稿に近年資料の蓄積が著しい宮崎県の旧石器時代遺跡の発掘調査について宮崎県埋蔵文化財センター松本茂氏に執筆を依頼した。2005年12月に行われた役員選挙の結果報告、渉外委員会を仲介として提供された韓国旧石器学会の設立と活動概要報告、2005年10月に首都大学東京で開催された考古学コロキウムの概要報告などを掲載した。

**渉外委員会** 韓国・中国・ロシアの学会組織との情報交換の一環として、1)国際組織立ち上げに関する準備会の開催、2)各国の組織の紹介、3)

国際学会の組織運営についてのガイドラインのまとめを行った。1) については、2005年8月に相談の会議（ロシア・アルタイの国際シンポジウムを利用）、2005年11月に予備会議（韓国丹陽・ソウルのスヤンゲ・シンポジウムを利用、2回開催）を行った。その結果、2006年4月22日・23日に第1回の設立準備会を北京で開催する予定であったが、不参加国があり延期された。2) については韓国旧石器学会について事務局のイ・ヒョンヒに原稿を依頼し、ニュースレター第5号に掲載した。3) については、アジアの旧石器研究交流の国際組織設立にあたり、各国で案を検討する必要があるため、本会設立総会で配布した「東アジア旧石器学会の組織と運営について」を尊重する形でガイドランをまとめた。

**研究企画委員会** 第4回大会の研究発表（一般研究・遺跡調査報告）の募集、シンポジウム「旧石器時代の狩猟を考える」の企画原案を作成をし、役員会の承認を経た後、開催準備（発表依頼、シンポジウム予稿集の編集）を行った。一般研究発表を重視し、1日目をそれに当てるとともに、シンポジウムはできるだけコンパクトにすることとした。記念講演を京都大学市川光雄氏に依頼することとした。また、2005年10月29日・30日に首都大学東京で開催された考古学コロキウムの後援を企画した。

**データベース委員会** 日本旧石器（先土器・岩宿）時代遺跡データベース作成事業を継続している。2004年12月に各都道府県責任者を通じてデータ作成を依頼した（都道府県責任者51名、地域分担者75名）。データは提出期限2005年9月30日としたが、遺跡数が膨大な地域も、年度末においてもすべての資料が手元に届いている状況ではない（2006年6月15日現在で、24道府県、3400ヶ所以上のデータを蓄積）。なお、今年度から新たに光石鳴巳会員に委員として加わっていただき、合計7名で事業を行うこととした。

**会計委員会** 第2回総会で承認された2004－2005年度予算案もとに予算の執行を行った。2004－2005年度はニュースレター3号分、会

誌第1号分、第2回・第3回研究発表・シンポジウム要旨の印刷費など、1年半を1年分の会費でまかなうため非常に厳しい予算であったため、予算の執行に困難を伴うことも予想されたが、関係者の努力によって、赤字となることもなく予算内ですべての事業を完了することができた。しかし、新たな事業を遂行するための予算はほとんどなく、会費の完納、新期会員の獲得、シンポジウム発表要旨・会誌の販売などにつとめ、さらに会計の安定化を計る必要がある。

## 2006年度活動計画

**総務委員会** 活動予定は、ほぼ例年通りで、総会、役員会の会場・連絡調整、各委員会間の調整、会誌2号、ニュースレター6号・7号の会員への発送、シンポジウム予稿集の配布、入会・会員住所変更等に関する諸事務などである。9月までに2006年度総会ならびに2回の役員会の会場・連絡調整、第4回研究発表・シンポジウムなどの会場・連絡などの事務を行った。

継続的な課題として、役員間の連絡体制の確立、新入会員の拡大、国際学会設立時の事務局体制などがあり、検討していきたい。

**会誌委員会** 会誌第2号の編集・発行および会誌第3号の編集を予定しており、第2号については2006年6月に刊行した。第3号は、巻頭言1、総説1、原著論文10以内、研究ノート1、資料報告1、書評1、2006年度活動報告などで構成し、原著論文のうち、半数以上は第4回シンポジウム関連論文を予定している。原稿の締切りは2006年9月30日で、2007年6月発行の予定である。

**ニュースレター委員会** 第6号を2006年9月、第7号を2007年3月に発行するよていである。第6号（本号）は2006年度総会、第4回研究発表・シンポジウムの報告ならびに2004－2005年度の委員会活動報告、2006年度の掲載と特別寄稿（北海道白滝遺跡群の調査）などで構成する。第7号は特別寄稿（日本周辺地域の近年の調査状況・研究動向など）、中国またはロシアの学会の

## 日本旧石器学会 2004 - 2005 年度決算内訳

## 通常会計

費 目	収 入			摘 要
	予算額	決算額	増 減	
1. 会費収入				
会費収入 (2004-2005)	850,000	890,000	40,000	178名×5,000円
会費収入 (2003-2004)		40,000		8名×5,000円
2. 雑収入				
会誌頒布代金	680,000	369,000	-311,000	総会、委託販売
シンポジウム予稿集頒布代金	280,000	755,000	475,000	総会、委託販売
雑収入		105,285	105,285	
前期繰越収支差額	397,705	397,705	0	
小計①	2,207,705	2,556,990	309,285	
費 目	支 出			摘 要
	予算額	決算額	増 減	
1. 一般事業費				
会議費	42,000	39,682	2,318	総会役員会、選挙管理委員会
旅費交通費	10,000	0	10,000	役員会交通費の臨時補填
通信運搬費	152,000	130,357	21,643	会誌・ニュースレター送料、諸通知、役員間連絡、他
消耗品費	37,000	32,452	4,548	事務用品、コピー、他
印刷製本費	1,108,000	970,935	137,065	会誌、ニュースレター3回、他
諸謝金	40,000	0	40,000	臨時事務補助謝金、他
雑費	10,000	8,180	1,820	雑費
予備費	397,705	0	397,705	
2. シンポジウム				
会場設営費	24,000	23,730	270	
通信運搬費	24,000	3,000	21,000	発表者・役員連絡、他
消耗品費	3,000	1,869	1,131	
印刷製本費	210,000	560,220	-350,220	予稿集印刷
謝金	150,000	80,000	70,000	発表者謝金
小計②	2,207,705	1,850,425	357,280	
小計①-小計②	0	706,565	-47,995	

## 日本旧石器学会 2006 年度予算内訳

## 通常会計

費 目	収 入			摘 要
	予算額	前年度予算額	増 減	
1. 会費収入				
会費収入	1,050,000	850,000	200,000	(会員194名)×5,000円、(前年度分16名)×5,000円
2. 雑収入				
会誌頒布代金	540,000	680,000	-140,000	120部×4000円=480,000円、1号20部×3000円=60,000円
シンポジウム予稿集頒布代金	312,000	280,000	32,000	会員頒布80部×1,200円=96,000円、一般頒布130部
前期繰越収支差額	706,565	397,705	308,860	*1,500円=195,000円、バックナンバー21,000円
小計①	2,608,565	2,207,705	400,860	
費 目	支 出			摘 要
	予算額	前年度予算額	増 減	
会議費・会場設営費	25,000	66,000	-41,000	役員会会議費、総会会場器材使用料、他
旅費交通費	80,000	10,000	70,000	役員会交通費、国際会議折衝渡航費の補填、他
通信運搬費	182,500	176,000	6,500	会誌・ニュースレター送料、諸通知、役員間連絡、校正連絡、他
消耗品費	47,000	40,000	7,000	事務用品、コピー、他
印刷製本費	1,249,500	1,318,000	-68,500	会誌、ニュースレター、他
諸謝金	228,000	190,000	38,000	臨時事務補助謝金、講演・シンポジウム発表謝金、他
雑費	10,000	10,000	0	雑費
予備費	786,565	397,705	388,860	予備費、他
小計②	2,608,565	2,207,705	400,860	
小計①-小計②	0	0	0	

紹介などを掲載の予定である。

**渉外委員会** 第1に国際組織設立準備委員会延期後、状況の進捗が見られないことから、中国、韓国、ロシアに呼びかけ、状況の打開を検討する予定である。第2に各国の組織を相互に紹介する活動を継続する予定である。ニュースレター第5号に韓国旧石器学会の紹介を行ったが、これに引き続き、中国、ロシアの学会について紹介原稿を

再度依頼予定である。一方、日本旧石器学会の紹介についてを韓国、中国、ロシアの学会誌への掲載を予定している。また、『旧石器研究』、『ニュースレター』の各国組織への送付を継続する。

**研究企画委員会** 第4回大会（研究発表・シンポジウム「旧石器時代の狩猟を考える」など）企画・実施と第5回大会の企画原案の作成を予定している。第4回大会については2004-2005年度に

作成した企画案に基づき、発表者の選定、発表依頼、予稿集編集・刊行などを行い、2006年6月17日、18日に埼玉県立歴史と民俗の博物館で開催された第4回大会の進行を行った。

**データベース委員会** 2006年6月現在においてもデータが出揃っていないことから、データ未提出の都道府県責任者には2006年9月末日を最終期限として作業を急いでいただけるよう再度お願いしている。本年度10月以降集まったデータを整理して公開の準備を進める予定であるが、データの公開方法について検討中である。デジタルデータの公開とともに印刷物としての公開も検討したい。また、データの公開に当たってはデータ作成協力者には何らかのメリットがあるように配慮したい。

**会計委員会** 2006年度総会で承認された予算案もとに予算の執行を行う予定である。

## 2006・2007年度役員会

役員選挙の結果に基づいて、2006年4月から新役員による役員会が発足しました。役員会の構成は以下の通りです。

会 長 稲田孝司

副会長 松藤和人

幹 事 安蒜政雄・伊藤健・大竹憲昭・小野昭・小畑弘己・木崎康弘・木村英明・佐川正敏・佐藤宏之・佐藤良二・渋谷孝雄・白石浩之・砂田佳弘・諏訪間順・堤隆・長沼孝・萩原博文・比田井民子・藤野次史・藤田尚

総務委員会：\*白石浩之・砂田佳弘・伊藤健（委員：西井幸雄・川合剛）

会計委員会：\*比田井民子・伊藤健

会誌委員会：\*諏訪間順・木崎康弘・佐藤宏之・藤田尚  
ニュースレター委員会：\*安蒜政雄・藤野次史・藤田尚（委員：谷和隆）

渉外委員会：\*小野昭・木村英明・松藤和人・小畑弘己・佐川正敏

研究企画委員会：\*堤隆・佐藤良二・小畑弘己・長沼孝・渋谷孝雄

データベース委員会：\*大竹憲昭・稲田孝司・長沼孝・萩原博文・渋谷孝雄・砂田佳弘（委員：光石鳴巳）

入会資格審査委員会：\*安蒜政雄・渋谷孝雄・小畑弘己

会計監査委員：\*鈴木次郎・亀田直美

顧 問：町田洋・小林達雄・馬場悠男

（\*が委員長）

## 国内関連学会のお知らせ

多摩川流域の考古学的遺跡の成立と古環境復元シンポジウム 「土と遺跡 時間と空間」る2万年

開催日 2007年1月27日（土）

開催場所

調布市文化会館「たづくり」 大会議場

電話 042-441-6111（調布市文化会館）

京王線調布駅南口 徒歩2分（調布市役所隣）

問合せ先

比田井民子（東京都埋蔵文化財センター）

電話 090-6163-5025

042-374-8044（東京都埋蔵文化財センター）

E-mail: hidai-tamiko@tef.or.jp

## 新入会員について

ニュースレター第4号発行後に以下の方々が本会に入会されました。

井関文明、沢田 敦、池谷信之、鶴田典昭、阿部 敬、道澤 明、河合章行、加藤秀之、山岡拓也、熊林佑充、稲葉理恵、石井 良

日本旧石器学会ニュースレター  
第6号

2006年10月31日発行

編集：日本旧石器学会ニュースレター委員会  
安蒜政雄・谷和隆・藤田尚・藤野次史

発行：日本旧石器学会

事務局：愛知学院大学文学部白石研究室

〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12

電話 05617-3-1111～8（内線3247）

E-mail hshira@dpc.aichi-gakuin.ac.jp